

サッカーのペナルティキック戦における状況の違いが キックパフォーマンスに及ぼす影響

217M10 前田凌汰

大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科

The influence of each situation in penalty shootouts on kick performance

Ryota Maeda

Graduate School of Sport and Exercise Sciences
Osaka University of Health and Sport Sciences

要旨

本研究の目的は、サッカーのペナルティキック戦（以下、PK戦）における状況の違いがキッカーの心理・生理面に及ぼす影響と、試行直前の心理・生理状態が行動に及ぼす影響を検証することであった。

大学サッカー部に所属している1・2年生32名（「決めれば勝ち」群16名、「外すと負け」群16名）を対象に、PK戦におけるPKを課題とした。実験参加者は後攻チームの5人目のキッカーとし、統制条件で1試行、実験条件で1試行キックを行った。また、ほかの選手がPKを実施しているビデオ映像を視聴させることで、状況を操作した。心理指標は、認知的不安（STAI Y-1を使用）、主観的緊張度、自信度（ともにVASを使用）、目標追求の方略とパフォーマンス評価であった。生理指標は、POLARを用いて平均心拍数と最大心拍数を測定し、行動指標は、高速度ビデオカメラ（CASIO社製EXILIM EX-FH100）を用いて、ゴールの中心点から蹴られたボールまでの距離と蹴られたボールの速度を算出した。分析方法は二要因分散分析であった。

「決めれば勝ち」群と「外すと負け」群の認知的不安得点を比較したところ、実験条件において約9点の違いが見られ、先行研究と比較しても大きな値であったことから、本研究の対象となった2つの状況はキッカーの認知的不安に大きな違いがあることが明らかとなった。

さらに、行動指標であるゴールの中心点から蹴られたボールまでの距離を測定した結果、実験条件において「外すと負け」群と比較して「決めれば勝ち」群はゴールの中心点からの距離が遠い位置にボールを蹴っていることが明らかとなった。